

De l'origine des fables の独創性

赤 木 昭 三

拙論「*De l'origine des fables* と *Sur l'histoire*」¹⁾ではJ-R. Carré, Dagen氏, Niderst氏につづいて Fontenelle の両作品の前後関係および *Sur l'histoire* の執筆時期を調べたが、その結果 *Sur l'histoire* は *De l'origine des fables* の原形ではなく、かえって後者の改作であり、*Sur l'histoire* の執筆時期は 1700年前後であろうことがほぼ確実になった。このことは単に Fontenelle 研究のみならず思想史的にも重要な意味をもつ。*De l'origine des fables* は宗教の起源という問題について、長い自由思想の流れの上で全く新しい視野を開いた作品であり、*Sur l'histoire* は18世紀の歴史観の先駆をなす重要な小品である。ところで従来の定説によれば、*Sur l'histoire*の方が *De l'origine des fables* の原形であり、しかも前者は1680年以前に、すなわち20余才の Fontenelle によって執筆されたことになっていた。この説は Fontenelle に異常な早熟性をおしつけると共に、百年を生きたこの *philosophe* の思想に何らの進展を認めない固定的な見方をとることになり、Fontenelle 解釈を大きくゆがめていたばかりか、自由思想と歴史に関する新しい思想の出現を、それぞれ10年および20年早めることによって、この時代の思想史の流れを少なからず加速していたことになる²⁾。Dagen 氏の論文³⁾ および前掲拙論の推定は、このようなゆがめられた Fontenelle 像と思想史に再検討を要求する。そこから引き出される結果は多いが、いま *De l'origine des fables* 研究にかぎってその 2, 3 をあげれば、

(1) *De l'origine des fables* を *Sur l'histoire* から 独立した作品として、

後者との関係を考慮に入れずに分析することができる⁴⁾。

(2) *De l'origine des fables*に見出される思想は、従来の説のように1680年以前のものではなく、同作品の執筆時期といわれる1691年～1699年のものである⁵⁾。

(3) したがって *De l'origine des fables* の思想の成立を調べるには、1683年の *Dialogues des morts* から *De l'origine des fables* にいたる重要な諸作品、すなわち *Histoire des oracles* (1686年)、*Entretiens sur la pluralité des mondes* (1686年)、*Doutes sur le système physique des causes occasionnelles* (1686年)、*Digression sur les Anciens et les Modernes* (1688年) などをもう一度検討し直す必要がある。その結果 Fontenelle の思想に、固定性をでなく、いくつかの段階的發展を主張しうる可能性があるかもしれない。

このような大きな問題を1回限りで片付けることは、もちろん紙数が許さないので、今回はまず *De l'origine des fables* を分析して筆者に重要と思われる思想を抽出し、つぎにこの思想が真に独創的なゆえんを Fontenelle 前後の自由思想と比較することによって証明するにとどめ、この思想の、Fontenelle の内部での發展を考察することはつぎの機会にまわしたい⁶⁾。

*

De l'origine des fables は Fontenelle の作品の中でも比較的知られることの少ないものであるから、まずその簡単な要約からはじめよう。

代表的な「神話」*fables* といえば、まずギリシア神話である。われわれは幼ない頃からこれに馴れ親しませられて別に何とも思わないけれども、「習慣の目」を捨ててよく考えてみると、これらの神話は《un amas de chimères, de rêveries et d'absurdités》にすぎないことがわかる。なぜこんな「奇怪な」ものが作られたのかよく考えてみようという前置きの後、神話生成の分析がはじまる⁷⁾。

(a) 「最初の人間たち」は無智で経験に乏しかったから、見るものすべて「不思議」ばかりであった。そこへさらに無意識の嘘がつけ加わる。というのは、われわれ自身反省してみればわかることだが、何か驚くべきことを他人に物語る場合、自然に想像力が働いてそれをより大きくするものであるし、その

上聴き手の驚きと感歎にいい気持になって、虚栄心から、さらに不思議を大きくするものだからだ。そしてこのように、はじめからすでにゆがめられた話が口から口へと伝わる中に、事態は一層悪くなり、「1世紀か2世紀後には、はじめにあったわずかの真実はもちろんのこと、はじめの嘘もほとんど残らなくなってしまっているだろう」⁸⁾。

(b) しかし神話誕生の原因はこれだけではない。「この粗野な時代にも一種の(自然)哲学があり *il y a eu de la philosophie*, それが神話の誕生に大いに貢献した」。こんな時代でも「人は自分の見るものの原因をたずね」ようにする。どういう風にか。現代のわれわれと全く同様にだ。すなわち既知のものによって未知のものを説明しようとするのだ。たとえば、「当時のいわばデカルト」は自問自答する。このつねに流れてやまぬ川の水は一体どこから来たのか？ それは誰かが、神が、壺から絶えず水を流しているのにちがいない。なぜなら壺から水を流すのは、よく見られるごく普通の現象だからだ。同様に、雷鳴が轟き、電光が閃くのは「人間の形をそなえた神が火の箭を放つ」ためであった。このように当時の哲学も今日の哲学と「原理」 *principes* は同じだ。

「すなわちわれわれは、自然界の未知の事柄を、われわれがつねに目にしている事柄によって説明し、経験によって与えられる観念を自然科学にもちこむのだ」が、最初の間人たちがやったのも同じことだ⁹⁾。

こうして「神話の大部分を注意深く考察すれば、それらが事実と当時の哲学との混合物にほかならないことがわかる。そして当時の哲学たるや〔当時の人間にとっての〕事実のもつ不思議を実にうまく説明し、それと実に自然に結びついたのだ」。たとえば、ある青年が川に落ち遺体が発見されないとする。当時の哲学では、川には川を治める乙女たちが住んでいることになっていた。そこでその青年はその乙女たちにさらわれたのだ。この解釈は実に自然であり、何の説明も要しないというわけだ¹⁰⁾。

(c) ところで「大部分の民族においては神話は宗教になった」¹¹⁾。「この粗野な哲学から神々が生れたのである。人間の想像力がこの偽りの神々をどのようにして創り出したかを見るのは、かなり興味あることだ。人々は電光を投げ、風を起し、海の波をざわめかせるなど自分たちにはできない多くのことを見た。これらはすべて彼らの力をはるかに超えたものであった。彼らは自分たちより

強力で、これらの偉大なこと *effet* を起しうるような存在を想像した。ところでこれらの存在が人間のような形姿をもったのは必然であった。それ以外のどんな形をとりえたであろう。そしてそれらが人間の形姿をとるからには、想像力は当然それらに人間的なすべてのものを賦与する。こうしてこれらの神々はあらゆる面において人間であり、彼らが人間と異なるところといえば、人間よりもつねに少々強力である点だけであった。

「そこからまたつぎのことが生じる。それはまだ今まで恐らくよく考えられなかったことだが、異教徒たちが想像でつくり上げたこれらすべての神々においては、力の観念が支配的であって、叡智とか正義とかその他神性とされるあらゆる属性はほとんど一切考慮されていないのだ。そしてこのことほど、これらの神々が極めて古いことをよく示すものはない。(…) 最初の人間たちは肉体の力以上に優れた性質を全く知らなかったし、叡智とか正義などは当時の言語においては、その名さえもたなかったのだ。ちょうど今日のアメリカの野蛮人たちにおけると同様に。(…) こうして彼らの想像した神々が、しばしば対立し合い、奇妙で、不正で、無智であるのも驚くべきことではない(…)

「ホメーロスが人間の性質を神々にもちこんだのだが、それよりも神々の性質を人間に移しかえた方がよかったのに、とキケロがどこかで云っている。だがそれは少々無理な要求だ。キケロがその当時神々の性質と呼んだものは、ホメーロスの時代には全く知られていなかったのだ。異教徒たちはつねに神々を彼ら自身にかたどって作った。かくて人間がより完全になるに応じて神々もまたそうなった。最初の人間たちは極めて粗暴であり、彼らには力がすべてだった。そこで神々もまたほとんど同じく粗暴であり、ただ少しばかりより強力であった。これがホメーロスの時代の神々だ。その後人間は叡智と正義の観念を抱きはじめ、神々もそれで得をした。すなわち神々もまた賢明で正しくなりはじめ、これら叡智や正義の観念が人々の間でより完全になるに従って、神々もつねにより賢明に、より正しくなっていた。これがキケロの時代の神々である」¹²⁾。

(d) 神話生成の原因としては、以上の他に「より一般的な2つの原理」が考えられる。1つは人間がある事柄にある解釈をあたえると、それに似た新しい事柄に同じ解釈を適用する性向である。たとえば何か或る異常な出来事が起

って、ある神がある女に恋したと信じられると、以後恋する神の話が次々生れるといった具合だ。1つを信じたのに何故もう1つ信じられないかという訳だ。他は「古代に対する盲目的な尊敬」だ。親、祖先がそれを信じたのだ。何故われわれの方が祖先より賢明だといえるかという訳だ。こうして前者は人間の愚かさを無限に拡張し、後者はそれを永遠にとどめておく。神話がこれ程馬鹿げた段階にまで達し、その段階に長く止まり続けたのはこのためである¹³⁾。

(e) つぎに Fontenelle は彼自身の神話生成説と先人のそれとの相違をのべ、Huet などの神話オリエント発生説を退けて、風土に関係なく、すべての民族の歴史が神話ではじまるのは人類の一般法則だと主張し、その証明のために、寒い北の国にも神話がある事実を挙げ、また「アメリカ・インディアンの神話とギリシアのそれとの間の驚くべき類似」を例示し、また古代中国の伝説とギリシア神話の類似を示す¹⁴⁾。

以上がこの作品の要約である¹⁵⁾。ではつぎにそこから Fontenelle のさまざまな興味ある思想を引き出してみよう。

*

I. 上記の要約で明らかのように、Fontenelle は神話および神々の誕生を、「われわれ」つまり彼自身を含めた同時代の人間の心理や思考のシステムで説明しようとしている。たとえば前掲(a)で、事実を誇張し、美化しようとする想像力や、聴き手を前にしての虚栄心をあげ、(d)で人間本来の保守性を指摘し、また(b)では、因果関係を知ろうとする人間の性向、既知の事柄でもって未知のものを説明しようとする思考の習性をあげたのち、これらが現代のわれわれとも共通であることを強調している、などがそれである。そしてこのことは Fontenelle が、人間の精神は時空をこえて不変であると確信していることを示す。もう十分明らかであろうが、念のために Fontenelle 自身の言葉を引いておこう。まず彼は冒頭の前置きで、神話生成の原因を知ることは人間精神そのものをもっともよく知ることだとのべている。

Eclaircissons, s'il se peut, cette matière : étudions l'esprit humain dans une de ses plus étranges productions : c'est là bien souvent qu'il se donne le mieux à connaître¹⁶⁾。

また(e)のあとで、

Nous n'avons fait entrer jusqu'à présent dans cette histoire de l'origine des fables, que ce qui est pris du fonds de la nature humaine, et en effet c'est ce qui y a dominé¹⁷⁾.

しかし人間精神は不変であるとしても、Fontenelle を含めて、17世紀末の人間が「最初の人間たち」と、また同時代のヨーロッパ人が「アメリカ・インディアンたち」と異なるのは明らかな事実である。なぜなら当面の問題に限っても、後者は神話を信じたが、前者はそれを批判している。この相違を彼はどう説明するか。彼はそれを質の相違であるよりも量的なそれであると見る。すなわち Fontenelle によれば、未開人と現代の文明人との相違は何よりも経験と知識の量の差である。

「最初の人間たち」は無知で経験がなかった。

A mesure que l'on est plus ignorant, et que l'on a moins d'expérience, on voit plus de prodiges. Les premiers hommes en virent donc beaucoup¹⁸⁾.

これにくらべて現代のわれわれにも同様に誤謬も多いし、誤まる原因も彼らと同じだ。しかしそれにもかかわらず、われわれのあやまりが彼らのそれより小さいのは、われわれは長い過去の知識、経験の蓄積の上に立っているからだ。つまりかれらより出発点がよかっただけだ。

Examinons les erreurs de ces siècles-ci, nous trouverons que les mêmes choses les ont établies, étendues et conservées. Il est vrai que nous ne sommes arrivés à aucune absurdité aussi considérable que les anciennes fables des Grecs ; mais c'est que nous ne sommes pas partis d'abord d'un point si absurde¹⁹⁾.

こういうわけだから、その進歩たるや遅々たるものだ。

Avec quelle prodigieuse lenteur les hommes arrivent à quelque chose de raisonnable, quelque simple qu'il soit ! (...) On aurait grand tort, après cela, d'être surpris que la philosophie et la manière de raisonner aient été pendant un grand nombre de siècles très grossières et très imparfaites, et qu'encore aujourd'hui les progrès en soient si lents²⁰⁾.

しかし「実に遅々たるもの」ではあれ進歩は確実に存在する。とすれば、人間の長い過去の歴史は単なる混沌ではなく、ある意味をもつ。したがって人間の歴史、少なくとも人間の精神の歴史を明らかにすることは無意味ではない。過去の大きな蒙昧、誤謬を知ることによって、それらに2度とおち入らないために、また見出された真理と正確な知識は「いかに小さいものであれ」この上なく貴重なものであるがゆえに。ここに18世紀の最も特徴的な思想の1つが、すでにうかがえると共に、Fontenelle自身が Académie des Sciences の *secrétaire perpétuel* という労多い職務を、40年にわたって忠実に根気強く献身的に遂行した原動力が見出されよう。しかしこれらの問題をより詳しく考察し、さらにこれらの問題での Fontenelle の独創性を、同時代の他の思想家たちとの比較において追求することはここでは到底不可能であるから、別の機会にゆずり、以下の考究に必要な範囲にとどめることにする。

II. そこでいよいよ神話と宗教の起源の問題であるが、この点について彼は人間の無知、想像力、虚栄心(a)、人間の思考の習性である誤った類推や保守性(b)など、人間を誤謬にみちびくいわば悪しき本性を強調する。この点では Antoine Adam 氏の指摘したように、Malebranche の誤謬論の影響が大きいことは疑いない²¹⁾が、しかし彼は神話や神々を、そのような人間精神の悪しき側面のみによって作られた全くの迷妄ときめつけるのではなく、そこに相対的にはあるが積極的、肯定的なものを見出そうとしている。すなわち前掲(b)(c)で見たように、神話や神々の生成には「一種の哲学」が大いに関与しており、その哲学を支えている思考方法、論理は現代のわれわれのそれと同じものなのである。そしてそれにもかかわらず未開人の神話がかくも荒唐無稽なものになったのは、ただ彼らが無知で経験に乏しかったためにすぎない。つまり神話や神々は世界についての、未開の段階としては一こういう表現が許されるならば一最も合理的な説明にはほかならないのである。

III. このように「最初の人間たち」や未開人にとって、神話や神々は「未開の段階としては」最も合理的な世界解釈であった。しかしすでにIで見たように、人間の精神は歴史をもち、時代と共に進歩する。このことを雄弁に示す実例としては、Fontenelle が前掲(c)で「まだ今まで恐らくよく考えられなかつ

たことだが」と並々ならぬ自信をもって語っている事実、すなわち、はじめは粗野で野蛮だった神々が、時代と共により理性的になり、より洗練されて行った事実をあげれば十分であろう。こうしてすべての民族は神話でもって出発する。時と共に無知は減り、誤った哲学は少なくなる。

L'ignorance diminue peu à peu, et par conséquent on vit moins de prodiges, on fit moins de faux systèmes de philosophie, les histoires furent moins fabuleuses ; car tout cela s'enchaîne²²⁾.

やがてキリスト教が、さらには理性の発達と Descartes および Malebranche の機械論哲学が神話信仰を完全に覆えし、より合理的に世界を認識することをわれわれに許す。

La religion et le bon sens nous ont désabusés des fables des Grecs²³⁾.

Heureusement nos erreurs ne sont pas si grandes [que celles des anciens Grecs], parce que nous sommes éclairés des lumières de la vraie religion, et, à ce que je crois, de quelques rayons de la vraie philosophie²⁴⁾.

そして誰が知ろう、人間精神の必然的な進歩の歩みによって、キリスト教も神の観念もやがては超えられ、無用の長物として棄て去られる段階が到来するかもしれないことを。このように Fontenelle は、神話と宗教を、人間精神の長い発展の歴史の中に置いて理解しようとし、それらが人間精神の発展の歴史の中で必然的に通らなければならない一段階ではあったが、やがてより高次の発展の段階においては必然的に超えられるべきものとして示すのである。そして以上Ⅱ、Ⅲに示された Fontenelle の神話と宗教に関する見解、すなわち、もう一度くりかえせば、神話や宗教は、未開の時代にあっては、合理的な世界解釈の手段であったという点で相対的な意義はみとめると共に、人間精神の発展の過程で当然超えられ、捨て去られるものであると、いわば相対的に否定するこの見解こそ、この問題についての17世紀の長い自由思想の流れに一時期を画する独創的な思想ということができる。そしてこれが真に独創的なゆえんは、つぎに Fontenelle 前後の自由思想家たちと比較することによって十分示されると思う²⁵⁾。

*

ここで直ちに自由思想家との比較に入る前に、まず序論として、この問題に対する当代の *savants chrétiens* の諸説との比較から始めるのが適当であろう。当時の重要な論点の1つはユダヤ教キリスト教的伝統以外の諸宗教の起源の問題、いいかえると、それら諸宗教とユダヤ教キリスト教的伝統との関係の問題であった（というのは、後者によれば、後者こそが最古の、最も正しい伝統であったから）。この問題に関する Fontenelle 前後の諸説を Albert Monod, Roger Mercier 氏, Roelens 氏など²⁶⁾によって—あまりに単純化しすぎる危険を冒して—要約すれば以下の通りである。まず Huet の *Demonstratio Evangelica* (1679年) が有名にした Plagiat 説。これによればエジプトの宗教、ギリシアの宗教その他もろもろの宗教はモーゼの教えをゆがめて模倣したものとされた。そしてヘブライ人とギリシア人を仲介したのはフェニキア人であった²⁷⁾。つぎに Louis Thomassin はカルデア人、アッシリア人、ペルシア人の諸宗教までを含めてその起源を「ノアとその子供達」にまで遡らせた²⁸⁾。ここまで遡らせればもはや plagiat 説はとりえない。そこで彼は異教徒たちの諸宗教の起源を、ノアに対する神の *révélation primitive* が時と共にゆがみ墮落したことによって、あるいはまた「神がわれわれに知らせることを欲し給うた諸原理を、われわれ各人の魂の底に刻みつけ給うた」こと(すなわち *révélation naturelle*) によって説明した²⁹⁾。

これらの説に対する Fontenelle の態度はどうであろうか。彼は冒頭で、
 Dans les premiers siècles du monde, et chez les nations qui n'avaient point entendu parler des traditions de la famille de Seth, ou qui ne les conservèrent pas, l'ignorance et la barbarie durent être à un excès ...³⁰⁾

とのべている。これは勿論 *se compromettre* しないための用心でもあろうが、同時に Roelens 氏も指摘するように³¹⁾、plagiat 説に背を向けたことを意味するととれる³²⁾。しかしこれだけでははっきりしないから、もう1つの証拠をあげよう。Fontenelleは末尾近くで、これまでのべた神話の起源の一般的な原因以外に、もちろん偶然的な特殊な原因もあるとのべ、その例として、フ

フェニキア人とエジプト人の神話がギリシア人に伝わった事実をあげ、その際滑稽な「言葉の取違え」*quiproquos* から多くの新らしい神話が 生れたことを指摘している³³⁾。フェニキア人は先程見たように *plagiat* 説の重要な要素の1つであった。しかし Fontenelle は、ここでは、ヘブライ人とギリシア人を仲介するというフェニキア人のこの重要な役割を全く無視している。この事實は、Fontenelle が神話の起源を論じるに際して、当時有力な *plagiat* 説を全く考慮に置いていないことを示している³⁴⁾。また *révélacion primitive* や *révélacion naturelle* にいたっては、すでにこれまでのべてきたように、Fontenelle がすべての神話、宗教の起源を、よきにせよ悪しきにせよ、すべて人間の後天的な創造物と見做している事實を思い起せば十分であろう。こうしてすべての民族は（おそらくユダヤ人をも含めて）神話、宗教を創作することからはじめ、すべての神話、宗教は（おそらくユダヤ教キリスト教を含めて）人間精神の段階的発展によって、すべて過去のもの無用のものになるという Fontenelle の一般法則が、同時代のキリスト教学者の見解といかに相違し、いかに独創的であるかは明らかであろう。それでは彼の前後の自由思想家のそれと比較して、同様の独創性を主張しうるであろうか。

*

神の観念の起源について、古代以来のさまざまな論拠を、力強い論理で数頁にまとめあげた一節が Gassendi の *Disquisitio metaphysica* にある³⁵⁾。だが Gassendi は *libertin* であるといいきれないし、この一節においても、神の観念を人間に与えたものは神の啓示であるという前提に立って話を進めている³⁶⁾のであるし、筆者自身以前にこの一節に触れたことがある³⁷⁾ので、ここではごく簡単に要約するにとどめるが、Gassendi は、神 *θεόν* という語の語源の解釈からはじめて、「最初の人間たち」*homines primi* は天体、特に太陽をまず *θεός* と呼び、ついで太陽が人間に多くの恩恵をもたらすことから、神の名をさまざまな人間たちや有益な泉、河川などに、さらには強力な諸王に与えた。これらをもとにして、へつらい者や詩人たちが多くの神話をつくり、最後に立法者たちが社会秩序のためにこれを大いに利用したとのべる。

つぎは正身正銘の *libertin*, La Mothe le Vayer である。

Les uns [de ces athées] estiment que les merveilles de la nature, les

éclipses des astres, les tremblements de terre, l'esclat des tonnerres, et choses semblables ayent donné la première impression à nos esprits d'une divinité.

Primus in orbe Deos fecit timor, ardua caelo

Fulmina dum caderent

Les autres sont à peu près de l'avis d'Épicure, qui rapportoit cette première connoissance aux visions prodigieuses que nous fournit nostre imagination pendant le sommeil (...); mais tous conviennet entre eux que les plus grands législateurs ne se sont servis de l'opinion vulgaire sur ce sujet, laquelle ils ont non seulement fomentée, mais accrûe de toute leur puissance, que pour emboucher de ce mors le sot peuple, pour le pouvoir mener à leur fantaisie⁸⁸⁾.

ここでも自然のさまざまな不思議や「立法者」などがあげられているが、Gassendiとの違いは、神の観念が、自然を見ての「恐怖」timorや夢などによって作られた迷妄であると仄かしていること、立法者の悪辣と民衆の愚かさが強調されていることであろう。そしてこの第2の点は *libertin politique* の代表 Gabriel Naudé によってさらに強められ、詳しく描かれる。すなわち彼によれば血にまみれた王朝の創建と宗教とは必ず手をたずさえて進む。

Et pour parler premièrement de l'érection, si nous considérons quels ont esté les commencemens de toutes les monarchies, nous trouverons tousjours qu'elles ont commencé par quelques unes de ces inventions et supercheries, en faisant marcher la Religion et les miracles en teste d'une longue suite de barbaries et de cruautéz⁸⁹⁾.

そしてこのような《supercheries》を許すものは民衆の愚昧と軽信である。

Aussi savons-nous que cette populace est comparée à une mer sujète à toutes sortes de vents et de tempestes : au Caméléon qui peut recevoir toutes sortes de couleurs excepté la blanche (...). Ses plus belles parties sont d'estre inconstant et variable, approuver et improuver quelque chose en mesme temps, courir tousjours d'un contraire à l'autre,

croire de léger (…). Bref, tout ce qu'elle pense n'est que vanité, tout ce qu'elle dit est faux et absurde, ce qu'elle improuve est bon, ce qu'elle approuve mauvais, ce qu'elle louë infame, tout ce qu'elle fait et entreprend n'est que pure folie⁴⁰⁾.

このように、神の観念は恐怖や無知、軽信から生れた迷妄であり、それが政治的圧制に利用されるというのが、1630年代の自由思想の代表的なパターンとってよいが、このパターンは Fontenelle の同時代のいくつかの libertin 文書にうけつがれ、そのまま繰返されることになる。

1659年頃書かれたという⁴¹⁾有名な libertin 秘密写本 *Theophrastus redivivus* にも、第1章 De Deis に、神の起源についての論議があるという⁴²⁾が、詳かにしない。しかし神の観念の原因は恐怖であるとのべていること⁴³⁾、すべての宗教は政治的必要の産物であると主張していること⁴⁴⁾は、作者がこの問題については、1630年代の libertins の延長線上にあることを示しているように思われる。つぎに Cyrano であるが、さまざまな問題についての大胆で突飛で想像力溢れる着想にもかかわらず、当面の主題についての言及は見出されない。ということは、彼もまたここでは師匠の La Mothe le Vayer や Naudé を超えていないと推定してさしつかえあるまい。また1630年代と17世紀末をつなぐ多くの libertins mondains または libertins poètes, すなわち Sarasin, Chapelle, Dehénault, Madame Deshoulières, Chaulieu, La Fare などにも、当然のことながら、この問題に関する論議はない。ただ Saint-Evremond の *Réflexions sur les divers Génies du Peuple Romain dans les divers temps de la République* なる大作⁴⁵⁾の冒頭に Naudé の影響と見られる一節がある。

Il est de l'origine des Peuples comme des genealogies des particuliers, on ne peut souffrir des commencemens bas et obscurs ; ceux-cy vont à la chimere, ceux-là donnent dans les fables. Les hommes sont naturellement defectueux et naturellement vains ; parmi eux les Fondateurs des Estats, les Conquerans, peu satistaicts de la condition humaine, dont ils connoissent les foiblesses et les défauts, ont cherché bien souvent hors d'elle la cause de leur merite ; et de là vient que les

Anciens ont voulu tenir ordinairement à quelque Dieu, dont ils se disoient descendus, ou dont ils reconnoissoient une protection particuliere. Quelques-uns ont fait semblant d'en estre persuadez pour persuader les autres, et sont servis ingenieusement d'une tromperie avantageuse qui donnoit de la veneration pour leurs personnes et de la soumission à leur puissance. Il y en a eu qui s'en sont flattez serieusement. Le mépris qu'ils faisoient des hommes, et l'opinion presomtueuse qu'ils avoient de leurs grandes qualités, leur a fait chercher chimeriquement une origine differente de la nôtre. Mais il est arrivé plus souvent que les Peuples, pour se faire honneur, et par un esprit de gratitude envers ceux qui les avoient bien servis, ont donné cours à cette sorte de fables⁴⁶⁾.

そして先程の Naudé の文章とくらべれば, Niderst 氏が指摘するとおり⁴⁷⁾, ただ《*législateurs*》のペテンを糾弾し, 民衆の愚昧を憎むだけでなく, この現象を心理的に納得がいくように説明しようとする態度がみられ, ここに Fontenelle の思想の1つ(前掲Iのはじめ)の萌芽らしきものが見出されることに注目しておこう。

このあたりから Fontenelle の直前ともいえる時期に入るわけだが, まず libertin ではないが, 30年代の Gassendi に対応するものとして, 先程も登場した Thomassin の *Méthode d'étudier les poètes* の第2巻, 第3巻(1682年)を挙げねばなるまい。著者は前述の如く, 古代異教徒の神の観念は *révélation primitive* が徐々にゆがみ, 墮落した形であることを前提としながらも, さまざまな自然崇拜, *évhémérisme*, または動物崇拜などを, in-8° 700頁にわたって驚くべき博識をもって展開する⁴⁸⁾。その片鱗をうかがうために, 著者自身が第2巻の Livre II の冒頭においたごく短かい要約を引用しておこう。

Il est assez paru dans les livres precedens, que le premier détour qu'on donna au culte du vrai Dieu, fut en se tournant vers les Astres, et vers les élemens, ou vers les plus grandes parties de la terre, comme les fleuves et les montagnes. On passa ensuite au culte des anim-

aux, comme aux Symboles des Astres et des Constellations. Enfin on en vint au culte des hommes, dont on donna le nom aux Astres, pour faire aussi rejaillir sur eux le culte qu'on rendoit à ces corps éclatans. Nous observerons dans ce livre la même suite, et nous examinerons premierement les Dieux naturels, puis nous viendrons aux autres que la fable choisit entre les animaux, ou entre les hommes⁴⁹⁾.

古代の知識の集大成ともいうべきこの作品は、別の目で見れば、17世紀末の libertins に尽きせぬ宝庫となったにちがひなく、事実 Fontenelle もこれを読んだことを彼自身認めている⁵⁰⁾。

つぎに17世紀末に現われた数々の空想旅行記であるが、架空の国を舞台に宗教批判をのべた作者たちの大多数が *déiste* だから当然であろうが、神と宗教の起源の問題についての言及は少なく、Gabriel de Foigny にも Gilbert にも Tyssot de Patot にも、また空想旅行記ではないが Lahontan の *Dialogues* (1703年) にもないようである。ただ Denis Veiras の *Histoire des Sévarambes* (英語版1675年、仏語版1677—1679年) が少しこの問題に触れている。引用文の冒頭の「il」とは、このユートピアの哲学者 Scromenas のことである。

Il tascha de faire voir, que naturellement les hommes n'ont pas plus de religion que les bestes, et que si ce n'étoit l'usage de la parole, ils n'auroient guères plus de lumière. Mais que par le moyen du discours ils s'entrecommuniquent leurs pensées, et que la plupart des Sciences et des Arts doivent leur origine et leurs progrès à l'art de s'expliquer en parlant. Il ajoûta que la religion devoit sa naissance à la curiosité et à la contemplation ; qu'avant que les hommes eussent établi aucun culte religieux ils vivoient comme les bêtes, et que les méditations de quelques personnages contemplatifs, qui par la considération de l'ordre de la Providence s'étoient peu à peu élevez à la pensée d'un être suprême et indépendant, avoit produit les premiers mouvemens de dévotion. Qu'ensuite des sentimens de respect et de reconnoissance avoient produit le culte extérieur qu'on avoit pratiqué à

l'égard de Dieu et du Soleil, son grand Ministre (...) Que c'étoit pour cette raison que l'adoration du Soleil étoit la plus ancienne, la plus générale et la plus plausible de toutes les adorations (...) Il dit que les premières cérémonies qu'on avoit instituées étoient fort simples (...) Que dans la suite l'ambition et l'avarice venant à s'y mêler on avoit farci la religion de mille cérémonies superstitieuses et ridicules, qui s'étoient établies par le tems et la coûtume malgré l'évidence de la raison et de la vérité⁵¹⁾.

すなわちこれによれば神の観念は、自然の秩序を観想することから生れ、はじめは素朴な宗教が、人々の《ambition》と《avarice》によって墮落したとされる。このパターンは以下に触れる多くの *libertin* 秘密写本と共通である。またここには漠然とながら歴史的变化と、その中での宗教の変化に対する感覚があることにも注目しておこう（長々と引用したのはそのためである）。ついでながら、この時期の大物を2人あげると、Spinozaにはこの問題についての論及はないようであるし、Lockeも、神の観念の *innéité* を否定し、それは《constitution and causes of things》を考究することによって獲得しうるとのべるにとどまり⁵²⁾、この問題では1630年代の反 Descartes 派、Gassendi や Pierre Petit を出していない。

ここで調査を打切ってもよいのであるが、念のために *De l'origine des fables* の出版の年である1725年あたりまでの *libertins* の秘密写本を調べて、Fontenelle の独創性をより際立たせてみよう。

まず1700年以前の作といわれる⁵³⁾ *Lettre d'Hypocrate à Damagette* であるが、作者は *déiste* であって、宇宙の秩序を正しく動かす原動力としての神を考え、宗教はこのような神を崇める人間の心の自然の性向から生れた⁵⁴⁾が、はじめは無垢な自然状態で生きて来た人間の中に社会が生れ、強者弱者の差が生じて、社会的強制の必要に宗教が利用されたと説く。ここにも歴史的变化とその中での宗教の変化との着目がある。

Il y a eu des temps où les hommes vivaient dans les voyes d'une nature toute pure, et non instruite ; une naïveté sans adrese, et une

simplicité sans art, réglèrent leur cœur, et leurs actions. Ils n'étaient point sous le joug des loix, l'ignorance bienheureuse du crime, et de la transgression, les exemptait de mal faire, et la liberté de suivre leur propre lumière dans le choix de leurs opinions sur l'auteur universel les mettait hors de reproche de l'impiété. (...) La médiocrité régnait partout. (...) On ne connaissait point de distinction parmi les hommes, il n'y avait ni empire ni servitude (...) Cette pureté s'altéra, par la funeste société de plusieurs familles qui se lièrent entre elles, et commencèrent à former de petits états. (...) On commença à goûter la gloire, et à se laisser toucher du sentiment de l'ambition. Pour lors, le plus faible devint la victime du plus fort, les conquérants s'élevèrent des trônes. (...) Le dégoût de se voir gouverner par un seul (...) donna la première idée de l'état populaire. Ce grand progrès de la disposition des hommes fit naître la nécessité de la Religion et du culte des Dieux⁵⁵⁾.

La Préface ou examen critique du livre de l'abbé Houtteville (1722年直後)にも、*Suite des Pyrrhoniens*(1723年直後)にも、宗教が législateurs によって作られ、利用されたことがのべられている⁵⁶⁾。有名な *Le militaire philosophe* (1706—1710年、あるいは1711年)⁵⁷⁾にも、宗教の起源は «intérêt, ambition, et l'envie de dominer» であるという表現がある⁵⁸⁾から、これも同じ意見と見てよかろう。

つぎにこれまた有名な *Traité des Trois Imposteurs* (1706年、あるいは1716年)⁵⁹⁾によれば、神の観念の原因は、自然に対する無知から生れた恐怖であり、それを législateurs が利用したとされる。

Ceux qui ignorent les causes physiques ont une crainte naturelle qui procède de l'inquiétude et du doute où ils sont s'il existe un Etre ou une puissance qui ait le pouvoir de leur nuire ou de les conserver. De là le penchant qu'ils ont à feindre des causes invisibles, qui ne sont que des Fantômes de leur imagination, qu'ils invoquent dans l'adversi-

té et qu'ils louent dans la prospérité. Ils s'en font des Dieux à la fin et cette crainte chimérique des puissances invisibles est la source des Religions que chacun se forme à sa mode. Ceux à qui il importait que le peuple fut contenu et arrêté par de semblables rêveries ont entrete- nu cette semence de Religion, en ont fait une loi et ont enfin réduit les peuples, par la terreur de l'avenir, à obéir aveuglément⁶⁰⁾.

最後にこれも有名な *Mémoire des pensées et des sentiments de Jean Mes- lier* (1729年以前)⁶¹⁾ であるが、神と宗教の起源については別にオリジナルな 意見はない(彼の独創性はまた別にある)。先の *Traité des Trois Imposteurs* が La Mothe le Vayer の伝統をつぐとすれば、民衆の《ignorance》, 《sot- tise》と為政者の《ruse》, 《malignité》を強調するこの *Mémoire* は Nau- dé の焼直しというべきか。

Il paraît assez clairement que la première croiance des Dieux ne vient que de ce que certains hommes, plus fins, plus rusés, plus subtils et peut-être même aussi plus malins et plus méchants que les autres, aient voulu s'élever par ambition audessus des autres et aiant voulu peut-être aussi se jouer agréablement de leur ignorance et de leur so- tise, se sont avisés de prendre le nom et la qualité de Dieu et de sou- verain Seigneur, pour se faire d'autant plus craindre et respecter, et les autres, soit par crainte, soit par sottise, soit par complaisance et par flatterie, les aiant laissé faire, ils se sont rendu les Maîtres, et étant les Maîtres, ils ont retenu le nom de Dieu et la qualité de souve- rain Seigneur, ...⁶²⁾

以上簡単であるが *De l'origine des fables* の同時代(1691年—1699年)お よびそれ以後1725年頃までの libertin 秘密写本を調査した。Fontenelle の独 創性を明らかにするために、Denis Veiras 以下の7作品を中心に、便宜上簡 単に図式化して整理してみると、大凡次の2系統に大別される。第1のグルー プは déiste のグループといてよいが、ここでは神の観念は自然の秩序の観 想などから生れた自然で純粹で正しいものであり、それが政治や人間の貪欲、

野心に悪用され墮落したとして、既成宗教攻撃に結びつけられることが多い。このパターンが典型的に現われているのは Denis Veiras の *Histoire des Sévarambes* と *Lettre d'Hypocrate à Damagette* であるが、このパターンの後段、つまり宗教の政治利用云々にしか触れていない *La préface ou examen critique du livre de l'abbé Houtteville* や *Suite des Pyrrhoniens* や *Le militaire philosophe* も、それらが *déiste* の文書であることや、それぞれの内容から見て、このグループに属すると見做すことができよう⁶³⁾。これに対して第2の、よりラディカルなグループでは、神の観念は自然に対する恐怖や無知、軽信から生れた迷妄であり、さらにそれが政治的圧制に利用されたと説く。このパターンは前述のごとく、1630年代の La Mothe le Vayer や Naudé にすでに明瞭に現われているが、当面の時代では *Traité des Trois Imposteurs* と Jean Meslier の *Mémoire* に受継がれている。

それでは Fontenelle の *De l'origine des fables* の思想は、これら2つのグループに対して一体どういう位置にあるのか。神の観念を全くの迷妄と否定する第2のグループに対しては、未開の時代にあっては最も合理的な世界解釈であったと、相対的に評価し、神の観念が、過去にあっても現在においても正しいと、絶対的に肯定する第1のグループに対しては、未開の時代には正しかったが、いずれ人間精神の必然的な発展はよって、やがては超えられ、捨てられるであろうと、いわば相対的に否定する⁶⁴⁾。そして Fontenelle にこのような独特な立場を可能にしたものは、Fontenelleにおける人間精神の歴史的発展の思想、および神と宗教の起源の問題を人間精神のこの歴史的発展と結びつけて考察するという新らしい卓抜な着想であった。そしてこの点については、先に触れたように、*Histoire des Sévarambes* と *Lettre d'Hypocrate à Damagette*、特に後者に、歴史的変化とそこでの宗教の変化に対する着目が見られたが、Fontenelle が人間精神の無限の進歩と、その進歩の歴史の中での神、宗教の必然的消滅を示唆するのに対し、上述の2つの *déiste* 文書においては、当然のことながら、歴史的変化は、発展あるいは進歩であるよりも、始源の純粹な光を曇らせ、ゆがめる悪しきものであることをにおわせる点で、まさに対照的といえるのである。

*

以上簡単であるが *De l'origine des fables* の思想を分析し、その独創性を調べてみた。秘かな憎悪、怨恨、挑戦性あるいはまた自己韜晦にゆがむ17世紀の *libertin* 文書に親しんだ読者ならば、*De l'origine des fables* の晴朗な否定に驚嘆し、自由思想も全く新しい段階に入ったという感慨に打たれるであろう。筆者もこの素朴な驚きから出発し、この驚くべき小品の独創性がどこにあるかを追求しようとした。その結果、独創性は大きさにおいて減じたが、より正確に把握されたといえるならば幸である。

注

- 1) 大阪大学教養部「研究集録」XIX, 外国語・外国文学 7, pp.45-67.
- 2) 詳しくは前掲拙論, pp.47-49参照.
- 3) Dagen, *Pour une histoire de la pensée de Fontenelle, R.H.L.F.*, 1967, pp.619-641.
- 4) *De l'origine des fables* の内容は、若干の重要な省略を除いて、ほぼそのまま *Sur l'histoire* に組入れられている。そして従来の定説によれば、後者が前者に先行するはずであるから、ややこしいことになった。詳しくは前掲拙論参照.
- 5) Trublet の証言による。cf. Fontenelle, *De l'origine des fables*, éd. Carré, 1932, p. 4.
- 6) したがって *De l'origine des fables* の思想を分析するにあたっては、原則として Fontenelle の他の作品を利用しないことにする。
- 7) Fontenelle, *De l'origine des fables*, éd. Carré, p.11.
- 8) *Ibid.*, pp.11-14.
- 9) *Ibid.*, pp.15-17.
- 10) *Ibid.*, pp.20-22.
- 11) *Ibid.*, p.34.
- 12) *Ibid.*, pp.17-20.
- 13) *Ibid.*, pp.26-28.
- 14) *Ibid.*, pp.29-33.
- 15) ただし Fontenelle は(e)以後にも若干の補足を付加えている(*Ibid.*, pp.34-40)が、その部分の要約は割愛する。
- 16) *Ibid.*, p.11.
- 17) *Ibid.*, p.35. また(e)のはじめで«Dans tout ce que je viens de dire, je n'ai sup-

posé dans les hommes que ce qui leur est commun à tous, et ce qui doit avoir son effet sous les zones glaciales comme sous la torride», *Ibid.*, p.30. ただし人間精神の不変性といっても Fontenelle の思想はユマニストやモラリストのそれとちがって甚だ唯物論的であることを付加しておこう。たとえば、ほぼ同時期(1688年)に書かれた *Digression sur les Anciens et les Modernes* でつぎのようにのべている。《Eclaircissons ce paradoxe. Si les anciens avaient plus d'esprit que nous, c'est donc que les cerveaux de ce temps-là étaient mieux disposés, formés de fibres plus fermes ou plus délicates, remplis de plus d'esprits animaux : mais en vertu de quoi les cerveaux de ce temps-là auraient-ils été mieux disposés ? 》, Fontenelle, *Entretiens sur la pluralité des mondes. Digression sur les Anciens et les Modernes*, edited by Shackleton, 1955, p. 161.

- 18) Fontenelle, *De l'origine des fables*, éd. Carré, p. 12.
- 19) *Ibid.*, pp.28-29. Fontenelle はこの作品では純粹に経験と知識の量の差とのべるとどめているので、これ以上の分析はさしひかえるが、しかし、彼は経験と知識の量の増大は当然思考方法の質的な差を引きおこすことに十分着目していることを付記する。なぜなら彼は *Digression* の中で数学と自然科学に関してつぎのようにのべている。《Les mathématiques, la physique, sont des sciences dont le joug s'appesantit toujours sur les savants : à la fin il y faudrait renoncer, mais les méthodes se multiplient en même temps ; le même esprit qui perfectionne les choses en y ajoutant de nouvelles vues, perfectionne aussi la manière de les apprendre en l'abrégant, et fournit de nouveaux moyens d'embrasser la nouvelle étendue qu'il donne aux sciences》, Fontenelle, *Entretiens sur la pluralité des mondes*, etc., edited by Shackleton, p.173.
- 20) Fontenelle, *De l'origine des fables*, éd. Carré, p.33.
- 21) Cf. Adam, *Histoire de la littérature française au XVII^e siècle*, tome V, pp. 221-222 ; *Ouvertures sur le XVIII^e siècle*, *Histoire des littératures*, Encyclopédie de la Pléiade, tome III, pp.528-529 ; *Les libertins au XVII^e siècle*, p.28 et pp.319-320.
- 22) Fontenelle, *De l'origine des fables*, éd. Carré, p.37.
- 23) *Ibid.*, p.35.
- 24) *Ibid.*, p.29.
- 25) なお前掲(e)においてはギリシア神話、北歐の神話、アメリカ・インディアンのそれ、または古代中国の伝説などの比較が生彩をもつてのべられ、そこから Fontenelle を神話と宗教に関する comparatisme moderne の創始者として強調する説が Carré などによってなされた (Carré, *La philosophie de Fontenelle*, 1932, 2e partie,

chap. VI ; l'histoire de la raison) が、この点はもう十分すぎるほど主張されたことであるから、ここではもう取上げないことにする。ただし Carré は Fontenelle のこの着想を1680年以前と見たので、sources の探求などですい分苦勞と無理をしていることを指摘しておこう。

- 26) Albert Monod, *De Pascal à Chateaubriand. Les défenseurs français du christianisme de 1670 à 1802*, 1916 ; Roger Mercier, *La réhabilitation de la nature humaine (1700-1750)*, 1960 ; Fontenelle, *Textes choisis*. Introduction et notes par Maurice Roelens, 1966.
- 27) Monod, *op. cit.*, pp.86-90 ; Dupront, *Pierre-Daniel Huet et l'exégèse comparatiste au XVII^e siècle*, 1930, pp.68-85.他に Huet の plagiat 説をつぐものとして有名なのは Faydit, *Remarques sur Virgile et sur Homère et sur le style poétique de l'Écriture sainte*, 1705 ; Laveur, *Conférence de la fable avec l'histoire sainte*, 1730 など. cf. Monod, *op. cit.*, p.257 sqq.
- 28) Thomassin, *La Méthode d'étudier et d'enseigner chrétiennement et solidement les lettres humaines par rapport aux lettres divines et aux Écritures. De l'étude des poètes*, 3 vol, 1681-1682. 同じ意見は次の著者にもある。Claude Fleury, *Grand Catéchisme historique*(1683), in *Oeuvre de l'Abbé Fleury*, Collection du Panthéon littéraire, 1884, p.450 ; Bernard Lamy, *Entretiens sur les sciences* (1684). Edition critique par Girbal et Clair, 1966, p.109. Cf. Monod, *op. cit.* p.260 et Mercier, *op. cit.*, p.107.
- 29) Monod, *op. cit.*, p.260 et p.283.
- 30) Fontenelle, *De l'origine des fables*, éd. Carré, pp.11-12.
- 31) Fontenelle, *Textes choisis*, éd. Roelens, p.221.
- 32) もう1箇所、同様の言明がある。《C'est par cette raison qu'il n'y en a aucun [peuple] dont l'histoire ne commence par des fables, hormis le peuple élu》, Fontenelle, *De l'origine des fables*, éd. Carré, p.33.
- 33) *Ibid.*, pp.35-37.
- 34) 彼はむしろ反対にユダヤ教, キリスト教的伝統がそれ以前の異教から, さまざまな諸要素を借りていることの方に興味をもったにちがいない。Adam 氏は Selden, Spenser, Marsham などの研究が若い Fontenelle の知的ミリウともいうべき Henri Justel のサークルで注目されていたことを指摘している。cf. Adam, *Hist. de la litt. fr. au XVII^e*, tome V, pp.219-220.
- 35) Gassendi, *Disquisitio metaphysica*. Texte établi, traduit et annoté par Rochot, 1962, pp.250-252.
- 36) 《...parce que j'étais persuadé(...)que notre première connaissance de Dieu venait d'une révélation faite par Dieu même, qu'il s'était lui-même manifesté aux premiers hommes créés par lui, puis que cette connaissance

- s'était répandue chez tous les hommes», *Ibid.*, p.250.
- 37) 「科学者 libertin の発生? — Pierre Petit の場合」 「フランス17世紀文学」 No.2, 1967, p.13.
- 38) La Mothe le Vayer, *Deux dialogues faits à l'imitation des Anciens*, p.p.E. Tisserand, 1922, pp.94-95. ただし引用は A. Adam, *Les libertins au XVII^e Siècles*, p.127 による.
- 39) Naudé, *Considérations politiques sur les Coups d'Etat*, 1639. 引用は Adam, *op. cit.*, p.142 による.
- 40) *Ibid.*, p.145.
- 41) Spink, *La diffusion des idées matérialistes et anti-religieuses au début du XVIII^e siècle : Le «Theophrastus redivivus»*, *R.H.L.F.*, 1937, p.249.
- 42) *Ibid.*
- 43) Spink, *La libre pensée française de Gassendi à Voltaire*, 1966, p.87.
- 44) *Ibid.* et Adam, *Les libertins au XVII^e siècle*, p.17.
- 45) 発表は1684年の *Oeuvres meslées*, éd. Barbin, tome VIII であるが, 実際の執筆時期は, Ternois の推定によれば, 1669年以前である (cf. Saint-Evremond, *Oeuvres en prose*, éd. Ternois, tome II, 1965, p.199 sqq.).
- 46) Saint-Evremond, *Oeuvres en prose*, éd. Ternois, tome II, pp.220-221. なお宗教が «législateurs» のづくりものであることを指摘する文章はこの他にも数箇所ある. その2, 3を挙げよう. まず *Considération sur la Religion* (1670-1671) に «J'ay passé d'une estude de Metaphysique a l'examen des Religions, et retournant à cette antiquité qui m'est si chere, je n'ay veu chés les Grecs et chés les Romains qu'un culte superstitieux d'idolâtres ou une invention humaine politiquement établie pour mieux gouverner les hommes», Saint-Evremond, *Oeuvres en prose*, tome IV, 1969, p.151. また1675年頃作の *Du merveilleux qui se trouve dans les poèmes des Anciens* に «Il y a eu des Législateurs qui se sont dits les interpretes de la volonté du Ciel, pour établir un culte religieux sans aucune entremise de la Raison», Saint-Evremond, *op. cit.*, p.193.
- 47) Saint-Evremond, *Textes choisis*. Introduction et notes par Alain Niderst, 1970, pp.141-142.
- 48) Thomassin, *Méthode d'étudier et d'enseigner chrétiennement et solidement les lettres humaines par rapport aux lettres divines et aux Ecritures. De l'étude des poètes*, tome II, Livre second, chap. I-chap. XLIX (pp.151-729), tome III, Livre premier, chap. I-VIII (pp.1-119).
- 49) *Ibid.*, tome II, p.151.
- 50) Fontenelle, *Histoire des oracles*, préface, in *Oeuvres complètes*, éd. Depping,

1818, tome II, p.89.

- 51) Lachèvre, *Les successeurs de Cyrano de Bergerac*, 1922, p.197.
- 52) «I doubt not but if a colony of young children should be placed in an island where no fire was, they would certainly neither have any notion of such a thing, nor name for it, how generally sover it were received and known in all the world besides ; and perhaps too their apprehensions would be as far removed from any name, or notion, of God, till some one amongst them had employed his thoughts to inquire into the constitution and causes of things, which would easily lead him to the notion of a God», Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, collated and annotated by Fraser, 1959, vol. I, pp.100-101.
- 53) Spink, *op. cit.*, p.347.
- 54) Wade, *The Clandestine Organization and Diffusion of Philosophic Ideas in France from 1700 to 1750*, 1938, pp.104-105.
- 55) Wade, *op. cit.*, pp.105-106.
- 56) Spink, *op. cit.*, pp.344-345 et p.348.
- 57) Spink, *op.cit.*, p.340 et Adam, *Le mouvement philosophique dans la première moitié du XVIII^e siècle*, 1967, p.133.
- 58) Wade, *op. cit.*, p.52.
- 59) 別名 *L'Esprit de Spinoza*. date は Prosper Marchand の推定による. cf. Wade, *op. cit.*, p.126.
- 60) Chapitre 1^{er}, De Dieu, § I. 引用は *Traité des Trois Imposteurs. Moïse, Jésus-Christ, Mahomet. Attribué à Mr le Baron d'Holbach*, La Bibliothèque du Libre Penseur, 1932, pp. 19-20 によった.
- 61) 1729年は Meslier 死去の年である. 1664年生れ, 1689年から le curé d'Etrépigny であり, ずい分以前から *Mémoire* を書き貯めていたことは十分考えられるのでここに取上げた. Roland Desné は1722年以前に執筆しはじめていたと推定していることを付記しておこう (cf. Jean Meslier, *Oeuvres complètes*, tome I, 1970, p.XXXI).
- 62) *Le Testament de Jean Meslier*, p.p. Rudolff Charles, 1864, tome II, p.298. Texte cité par Dommanget dans *Le Curé Meslier*, 1965, p.238. なお統治者につけこまれる民衆の愚昧と軽信をのべるところに Fontenelle を思わせる文章があることを指摘しておこう. «Mais rien ne prete plus beau jeu à l'imposture et au progrès qu'elle fait dans le monde, que cette avide curiosité que les peuples ont ordinairement d'entendre parler de choses extraordinaires et prodigieuses, et cette grande facilité qu'ils ont de les croire ; car comme on voit qu'ils prennent plaisir à en entendre parler, qu'ils les écoutent avec étonne-

ment, et avec admiration, et qu'ils regardent toutes ces choses comme des vérités constantes, les hypocrites de leur coté, et les imposteurs du leur prennent plaisir à leur forger des fables, et à leur en conter tant qu'ils veulent», Jean Meslier, *Oeuvres Complètes*, tome I, pp.69-70. Meslier は例証として Montaigne と Lucien を引いている (*Ibid.*, pp.70-73).

- 63) *La Préface ou examen critique* の内容は《profession ouverte du déisme》とキリスト教攻撃である (Spink, *op. cit.*, pp.344-345). *Le militaire philosophe* の作者も déiste であり (《Qu'on s'en tienne donc aux principes généraux incontestables qu'il y a un Dieu auteur de toutes choses, qui récompensera la vertu et punira le vice : qu'il n'y a d'autre vertu que d'adorer Dieu intérieurement du fond du cœur (...) en un mot qu'il n'y a point de Religion que ce que la pure raison, sans intérêt et sans suggestion nous dicte》, Wade, *op. cit.*, pp.62-63), 激烈なキリスト教攻撃が déiste の信条とむすびつけられている (《Le Vrai Dieu n'en [des prêtres] a que faire, qu'ils sont aux autres hommes ce que les loups sont aux brebis et que c'est eux qui de la Religion Naturelle dictée par Dieu même, ont fait une religion factice, pleine de fables, d'impertinence et de crimes de Nature》, *Ibid.*, p.55). *Suite des Pyrrhoniens* は表題に pyrrhoniens とあることや, また《qu'on peut douter si les religions viennent immédiatement de Dieu ou de l'invention des politiques pour faire craindre et garder les préceptes de l'homme》, という副題をもつことからしてすでに, これをはっきり第1のグループに入れてしまうことにちゅうちょを感じないでもない. 現在ロンドンに私蔵されているこの作品の唯一の現存写本を見た Spink 氏の分析を見ても, déisme とさらに radical な否定の間で態度を決定していない風が見える. しかし Spink 氏の要約の中に《Les préceptes moraux les plus importants sont inscrits par Dieu dans le cœur de tous les hommes》などの文章があるので一応第1のグループに入れておく (Spink, *op. cit.*, pp.348-349). なおこの文書を2つのグループのどちらに分類するかは, この作品自体の問題であって, Fontenelle の思想の独創性を明らかにするという当面の課題には直接関係はないことも付記しておきたい.
- 64) Fontenelle は, 宗教の政治利用については触れていない. この点についてはあらためて Fontenelle の政治観と関係させて論じるのが適当であろう.

(M. 34. 本学助教授)